



高校生の 進路選択を考える

第11回 島根県立隠岐島前高等学校・隠岐國学習センター

地域課題に向き合い、高校と地域が一丸となって 「魅力ある地域のつくり手」を育成するキャリア教育を推進

このコーナーでは、社会が変化し、高校教育・大学教育・大学入学者選抜も変わっていく中で、高校生の進路選択、高校での進路指導はどのように変わっていくのか、考えていく。

今回は、教育寮を整備し島外からの進学者を受け入れる「島留学」や、地域課題の発見・解決をめざす探究学習などで注目を集める、島根県立隠岐島前高校の取り組みを紹介する。同校は行政や地域住民、さらに連携型公立塾「隠岐國学習センター」のスタッフとも連携・協働し、キャリア教育や学習指導を充実させている。

そこで、島前高校の多々納雄二校長、キャリア教育部主任の登城智宏先生、隠岐國学習センターの澤正輝さんと中山隆さんに、地域課題に取り組むキャリア教育の効果や課題、地域連携の意義などについてうかがった。

学校存続の危機から生まれた 「島前高校魅力化プロジェクト」

島根県松江市から北に60km、隠岐諸島の中ノ島（海士町）に位置する島根県立隠岐島前高等学校（以下、島前高校）は、島前地域（知夫里島、中ノ島、西ノ島）で唯一の高校だ。

島前地域は、2000年代頃から少子高齢化が進み、2008年度には島前高校への入学者は28名、全校生徒も89名まで減少していた。島根県の県立高校は入学者が21名を下回ると統廃合検討の対象となるため、このままでは近い将来、島前高校もその対象になることが危惧されていた。

島から高校がなくなれば、地元の中学生が島外の高校に進学せざるを得なくなる。子どもを下宿させる経済的な余裕がない家庭は家族ごと島を離れてしまうことも考えられる。そして、一度島を離れてしまうと、将来島に戻りたいという意識も希薄に

なり、人口減少がさらに加速するという恐れもあった。

「高校の存続は、島の存続に直結する」。そんな共通の危機感の下、2008年度に、島前3町村（3島）が協議し、島前高校、PTA、地域の中学校など、地域の総力を結集し、「島前高校魅力化プロジェクト」（以下、魅力化プロジェクト）がスタートした。日本各地から入学者を募る「島留学」制度や、地域住民が島留學生の支援をする「島親」制度、山積する地域課題にチームで協働的に取り組む、課題解決型の探究学習の構築、学校と地域の連携型公立塾「隠岐國

学習センター」の設立など、さまざまな取り組みを進めてきた。

「地域が一体となって取り組みを進めた結果、島根県内だけでなく、日本全国から生徒が集まる高校になりました。近年は、『島留学』で入学する島外生は定員以上の入学希望者が集まっていますし、島前地域の3つの中学校から本校に進学する生徒の減少も止まりました。2018年度の生徒数は179名と、10年前と比べて倍増し、全学年が2クラスと、学級数も増えています。これは少子化の激しい離島の高校では異例のことです」（多々納雄二校長）



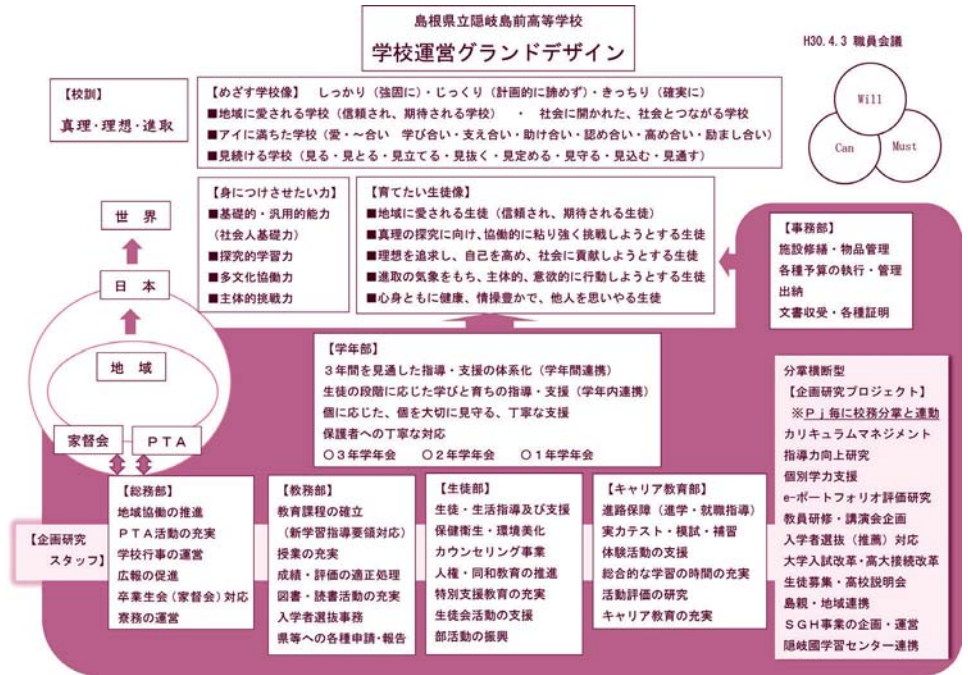
多々納雄二校長

登城智宏先生

澤正輝さん

中山隆さん

<図> H30 学校経営グランドデザイン



キャリア教育部主任の登城智宏先生は、生徒数が減少し続けていた時期を知る数少ない教員の一人だ。

「私は2004～2007年度に本校で勤務した後、本土の高校を経て、今春からふたたび本校に転任してきてのですが、本当に同じ学校かと信じられないくらい、活気のある学校に変貌して

驚きました。『島留学』が定着し、現在は島内生と島外生が半々くらいの割合ですが、外からの風が入ってきたことが、生徒数の増加以上に学校の活力という点で、良い効果を生んでいると感じています。例えば、島外生の目を通して島の子どもたちが、自分たちの暮らすこの島前には、美しい風景や誇るべき自然遺産や文化遺産がたくさんあるのだと気付かされることも、多大な成果の一つです。それがきっかけで、もう一度、生まれ育った地域を見直してみようとか、地域のために何ができるんだろうなど、考えるようになります。島外生たちの新鮮なものの見方と、島の伝統文化を知っている島の子たちが、1つの学舎でともに学ぶことで、とてもいい化学反応が起きていると思いますね。また、島内出身者のみでは人間関係が固定化し、のんびりしがちですが、島外生が入ることで、良い意味で競争が生まれているとも感じます」(登城先生)

**探究学習や部活動を通じて
島前地域の課題を発見し、
解決に向けて実践**

島前高校では、「地域のつくり手の育成」をテーマとして、地域と連携

したキャリア教育を展開している。

その一つが、1・2年生のキャリア教育「夢探究」である。生徒たちは、経営者や大学教員などの出前講義を聴くほか、地域に飛び出して、さまざまな人々に仕事について聞き、チームでディスカッションしてプレゼンテーションすることを繰り返す。それらを通じて、自分は将来何をしたいのかを考えていく。

離島である島前地域には、人口減少、超少子高齢化、後継者不足、産業の衰退など、問題が山積している。生徒たちは、教室から飛び出して島前3町村に出かけ、地域に実在する課題を発見し、解決方法を探究したり、現場で実践したりする。教科学習との関連性と時間確保の意味で学校設定科目「地域生活学」とリンクさせて、探究学習は進められていく。

「探究学習では、『地域を活性化させるビジネスプラン』をテーマに、5～6人のチームで学習を進めます。1年次2学期までに、地域の人々へのインタビューなどを通じて、解決したい課題を発見し、解決への仮説を組み立てます。次に、1年次3学

期から2年次2学期頃まで、約1年間をかけて、各チームが設定した課題を解決する方法を考察し、実践してみて、課題解決にどの程度有効だったかを検証します」(登城先生)

2017年度の例を紹介すると、島前地域の知夫村(知夫里島)で「マルシェ(市場)」を立ち上げるプロジェクトがあった。知夫村は良質な野菜の産地だが、それを売る場がないこと、また、生産者の高齢化が進んでおり、車を運転できないため、市場に出回らないという課題があった。そこに着眼したチームが、村の中心部にマルシェを開設するとともに、知夫村内に住む車を持つ人々に呼びかけて、市場の開設と流通システムの確立を実現させたというものだ。この取り組みは地域の人々からも非常に好評で、マルシェには多くの人が訪れたという。

探究学習での研究成果は、2年次11月のシンガポール研修旅行において、現地の大学生に向けて英語で発表する。島前高校は2015年度から5年間、スーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定されており、現

在は「グローバル人材」の育成をめざした取り組みに力を入れている。研修旅行は、その取り組みの柱として位置付けられている。

さらに、3年次には選択科目として学校設定科目「地域地球学」を置き、履修した生徒は課題解決型学習を継続できる。

地域と関わる活動を中心とする部活動もある。例えば、「ヒトツナギ部」は、「ひと」を観光資源と捉え、体験型観光のプランニングとツアーの実践を行う部活動であり、2009年に開催された「第1回観光甲子園」では、『ヒトツナギ』～人との出会いから始まる君だけの島前三島物語～という観光プランが文部科学大臣賞を獲得。現在も継続的に活動している。「地域国際交流部」は、地域のボランティア活動や国際交流、保育、福祉、料理、情報発信などから、好きなテーマを選んで活動する。

これらのさまざまな取り組みの中で、生徒は地域に対する愛着を持つだけでなく、地域の一員として何ができるのかを考え、他者とつながりながら物事を解決することの大切さや難しさを体感的に学んでいく。

高校と公立塾が連携・協働し 学力向上と進路実現を支援

高校教育を充実させるためには、教科学力の向上や進路実現に向けた体制づくりも不可欠だ。しかし、島前高校に通う生徒たちは、進路希望も国立大学から、専門学校、就職と多様で、教科の学習の習熟度も幅広い。そうした生徒たちが1つの教室に混在するため、生徒一人ひとりへの個別指導が欠かせないが、教員数も限られているため、なかなか指導が難しい状況にあった。また、島内

には塾や予備校がないことから、大学受験等への対応に不安もあった。そこで、2010年に設立されたのが、高校と連携して生徒や教員を支援する公立塾「隠岐国学習センター」（以下、センター）である。

センターでは、生徒自らが目標や計画を立てて勉強できるようになる「自立学習支援」と、生徒の将来の夢を明確にし、進路実現や学習のモチベーションを高めるための対話型授業「夢ゼミ」が行われている。設立当初は10名だった受講者も、今では島前高校の全生徒の7割にあたる130名近くの生徒が通っている。スタッフは全国各地から採用される。教育関係のみならず、職歴などにさまざまなバックグラウンドを持つ、個性派ぞろいだ。就任4年目の中山隆さんと2年目の澤 正輝さんに話を聞いた。

「進路選択が非常に多様な島前高校では、一律の進路指導が難しいです。大学進学希望者も、AO入試や推薦入試を希望する生徒も多いですし、就職希望者も、職種によっては英語力が求められるなど、力を入れて学習する教科・科目が大きく異なります。センターが支援する『自立学習』では、生徒それぞれの目標に合わせ、どのような教科・科目をどのようなスケジュールで学習するのか、計画を立てて実践し、振り返って次の計画に生かすという一連の流れを、主体的に行えるように指導しています。これができるようになると、卒業後、進学したとしても就職したとしても、自分なりに学びを続けられる基盤になります」（中山さん）

センターの校舎は島前高校のすぐ近くにあり、学習支援については、島前高校の担任や各科目の担当教員と

綿密な情報交換を行いながら進められている。授業内容も、生徒各人の進路希望に合わせて行う講義形式や、自分のペースで進める個別学習、映像授業などを柔軟に組み合わせているという。

夢ゼミの内容は、島前高校のキャリア教育「夢探究」と連動している。1・2年生向けの夢ゼミは隔週で実施。多様なゲストを迎え、講演や対話を通じて、地域の課題について考えていく。今年度からは、校舎内にICT機器を整備し、大学教員や企業人などからキャリアデザインに関する話を聴いたり、他地域の高校生と互いの地域について紹介し合い地域課題に対する取り組みについて議論したりする「遠隔夢ゼミ」も実施している。

3年生向けの夢ゼミはプロジェクト学習で、週に1回実施している。センターのスタッフとの対話を通じて、自分の過去の行動を振り返ったり、好きなものや大切にしていることといった価値観を言語化したりするとともに、解決したい課題を見つけ、自分のテーマを設定し、それについて実践を通して探究するものである。自分の興味と地域・社会との接点を模索しながら夢を明確にすることで、地域・社会に貢献していくというビジョンをふまえた、自分なりの進路実現につなげていく。

「夢ゼミのプログラムは、スタッフがアイデアを出し合っています。高校ではなくセンターだからこそできることがあると考え、かなり実験的な取り組みも行います。探究活動でも、難しいテーマに挑戦する生徒も応援するようにしています。彼らが安心してチャレンジでき、安心して失敗できる環境が、校内外にあるこ

とが大事です。チャレンジと失敗を積み重ねる濃密な高校時代の3年間こそが進路実現の原動力になってくれるのではないかと、私は思います」(澤 正輝さん)

グローバル+ローカルで「グローバル」な人材の育成をめざす

ここまで紹介したように、島前高校は地域との連携の下で、非常に先進的な教育活動に挑戦してきた。その成果について多々納校長は以下のように語る。

「学校はとかく閉じられていると言われがちですが、本校の場合は、学校教員とセンターのスタッフ、保護者、魅力化コーディネーター、地域町村の職員など、あらゆる関係者が一体感を持って、本校をよくするために協働してくださっています。いろいろな立場の大人たちが、さまざまな側面から学校教育に関わってくださっていることが、島前高校の最大の強みだと思います。地域に支えられながら、低年次から課題探究などさまざまなことに挑戦するためか、本校の生徒たちは自立心が強く、主体的に活動する意欲が非常に強いと感じます。また、大きな期待感を抱いて全国からやってきた島外生たちが、『島前高校に入学してよかった』と言って卒業していくことにも、手応えを感じています。『魅力化プロジェクト』は、本校の教育を魅力的にすることで、人口流出を防ぐことを目的としています。実際に、本校で学んで島外の大学に進学した卒業生の中には、ゆくゆくは島へ戻って地域のために貢献したいと言ってくれる人も出てきています。10年前に島に蒔かれた種は、花を咲かせつつあると

言ってもいいのではないのでしょうか」

一方で、課題もある。例えば、島前高校の教員は、約半数が常勤講師で、平均年齢が30代前半と、経験の少ない教員が多いのが現状である。現在、全国から講師を募集しているほか、他県の教諭を3年程度受け入れる制度も模索している。また、センター、町村などの横のつながりは構築できたため、今後は小・中学校、大学などと縦の連携も強化していく。

さらに、近年は島前高校の取り組みなどを参考に、全国のさまざまな地域で島留学や地域課題解決型のキャリア教育を推進する学校が増えている。今後は、島前高校だからこそできることを明確にして、持ち味を強化していきたいという。

キャリア教育の今後に話が及ぶと、多々納校長の口調にいつそうの熱がこもる。

「今後は、卒業生と保護者、地域の関係者のご支援を受けながら、離島というこの非常にローカルな環境に

ある本校から、全国へ、そして日本から世界へと羽ばたいて行ける人材、世界で何かを掴み取ってから、また島前に戻ってきてくれる人材。そんなローカルの魅力とグローバルな視野を併せ持つ、グローバルな人財を育成することができたらと思います。そのために、SGHの枠組みを活用し、シンガポールへの海外研修のほか、ブータン、ロシア、エストニアなど、さまざまな国・地域との交流も充実させています。また、基礎学力の底上げも図っていきたくと考えています。キャリア教育のキーワードは、“知る”“関わる”“つなぐ”“生かす”の4つだと言われます。本校の生徒たちは後ろ3つは実践できるようになりつつありますから、伸び代のある知の部分強化すれば、もっと進化できると考えています」

地域課題と向き合うキャリア教育の進化にさらなる拍車をかける、島根県立隠岐島前高校の今後が目が離せない。

島根県立隠岐島前高等学校 (全日制)

◇所在地：島根県隠岐郡海士町福井 1403

◇沿革：1955 (昭和30) 年 島根県立隠岐高等学校島前分校 (定時制) として開校
1958 (昭和33) 年 全国初の全日制分校に改組
1965 (昭和40) 年 島根県立隠岐島前高等学校 (普通科) として分離独立
2010 (平成22) 年 「島前高校魅力化プロジェクト」がスタート
2015 (平成27) 年 スーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定 (5年間)

◇学級編成：普通科 各学年2クラス

◇生徒数：179名 (男子76名、女子103名) 2018年5月1日現在

◇特色：地域の現状と課題を認識し、地域や社会に貢献しようとする志を持つ人材 (人財) の育成をミッションとする。「島留学」や地域と連携・協働した課題解決型学習は大きな注目を集め、全国から多くの教育関係者が視察に訪れている。近年は、習熟度別の少人数指導や、ICT環境を活用した教科指導にも力を入れている。

◇卒業生の進路：2018年5月1日現在 2017年度卒業生55名
・進路：4年生大学24名、短期大学1名、専門学校他23名、就職7名
・合格者の内訳 (現役生、延数)：国公立大学9名、私立大学17名